

健康と病いの語りディペックスへの私的な思い

8 コーディネーター 秋元秀俊

「病いの語り」については、個人的に特別な思いがあって、そのために医療政策人材養成講座で同期だった佐久間さんがディペックスの活動を始めることを知って手伝っている次第です（実態は、ほとんど邪魔をしているようなものです）。

私は、職人から始まって様々な仕事を転々としていましたが、ひよんなことから30歳を過ぎて外資系の小さな出版社に引っ張られ、歯科の雑誌を任せられました。なーんだ、歯医者さんの小さな出版社かと思われるでしょうが、ほとんど底辺の仕事をしていた私にとっては、部数さえ伸ばせば、どんな実験をしてもいいというのは、もう夢のようなことでした。

医療はもちろん歯科の知識などまるでゼロでした。雑誌づくりもズブの素人で、創刊のタイムスケジュールは目前に迫っていましたので、学術出版のルールをにわか勉強し、新卒の新入社員とともに走り出したのですが、毎号のように新しい企画を打ち出すことに苦労はありませんでした。

そのひとつが、「患者の言葉で歯科医療を考える」という特集（1985年5月）でした。首都圏の社会学の院生・学生をアルバイトに使って半年がかり、40人の歯科患者インタビューをもとに、語られた病気・治療体験を意味論的に考察した記事でした。振り返ればロシアフォルマリズムの方法を使いながら、『隠喩としての病い』（スーザン・ソントグ）をパラフレーズしたようなものに過ぎないのですが、患者の語りを正面から主題にしたフィールド研究であることは事実です。ナラティブという言葉が使われる15年以上も前のことで、ひとり勝手にA.W. フランクに先立つ先駆的な仕事だったと自負しています。

小さかった雑誌も急成長して実験的なことを試みる立場ではなくなったため、創刊から10年を待たずに私はその会社を離れましたが、四半世紀を経てなお、患者がその体験を語り始めることに特別の関心を抱き続けています。こういうわけで、私はディペックスの立ち上げを傍観しているわけにはいかなかったという次第です。